

第48回日本小児皮膚科学会学術大会 を開催して

(2024年7月6・7日)
ステーションコンファレンス東京

石河 晃

東邦大学医学部皮膚科学講座教授

はじめに

日本小児皮膚科学会は1977年、東邦大学皮膚科第2代教授の安田利顕先生を会頭、国立小児病院皮膚科部長の山本一哉先生を事務局長として第1回学術大会を笹川記念会館で開催しました。安田先生は私の現職の大先輩、山本先生は母校の大先輩にあたり、縁の深い先輩方が始められたこの学会の会頭を務めさせていただくことはたいへん光栄に存じております。

私は1987年、国立小児病院皮膚科で3カ月間の出向研修の機会があり、直接山本先生の薫陶を受けました。当時、アトピー性皮膚炎は食事アレルギーが原因であるとする論調が強く、マスコミにも取り上げられやすい時代でしたが、山本先生は食物

アレルギーは皮膚を介して感作がおこるのであると強く反論していたことが思い出されます。現在では経皮感作であることがコンセンサスとなったことは皆様ご承知の通りです。

第7回からは会頭、副会頭は皮膚科と小児科が交互に務める形となっています。今回の学術大会では副会頭を小児白血病をご専門とする高橋浩之先生にお願いいたしました(図1)。Webでの配信をやめ、現地参加のみとする一方、全国からのアクセスがよい、東京駅直結のステーションコンファレンス東京を会場といたしました。

テーマ

学術大会のテーマは「ともに歩もう明るい未来へ」といたしました。このテーマには2つの意味を込めました。1つは「医師」と「患者」がともに歩もう、ということです。前述の山本一哉先生が患者さんとお母さんに接する姿を間近でみて学んだものを表現したいと考えました。それは、医師は決して一方的に話をするのではなく、ときどきお母さんへの簡単な質問を繰り返しつつ会話の中に引き込み、現状を共有しながらともに病気に立ち向かう姿勢です。もう1つは「皮膚科医」と「小児科医」がともに歩もう、という思いを込めました。子どもの皮膚疾患は小児科の先生方がファーストタッチになることも少なくありません。皮膚科医はもちろん小児の皮膚疾患をみていますが、どうしても皮膚症状を治すことだけに専念しがちで、全身をみたり、家族や兄弟のことに思いが及ぶことは少な



図1 左から高橋浩之副会頭、小生、種瀬啓士事務局長



図2 舘田一博教授による特別講演

いといえます。

近年アトピー性皮膚炎の治療にバイオ製剤が導入され、成果をあげています。小児にも適応が拡大され、小児科の先生方もバイオ製剤を使用する機会が増えることと思います。しかし、バイオ治療に対する考え方は皮膚科医と小児科医で必ずしも完全に一致しているとはいえず、両者が情報を共有してブレのない治療方針を立てることはこれから重要性が増すと思われます。今学会はアトピー性皮膚炎をテーマとしたシンポジウムを多数組みました。

プログラム

特別講演はNHKでのコロナ解説でおなじみの、日本感染症学会前理事長の舘田一博教授(東邦大学微生物・感染症学講座)にお願いいたしました(図2)。パンデミックとなったCOVID-19の総括から始まり、目にはみえない形で世界中に蔓延し、サイレント・パンデミックともいわれる多剤耐性菌についてお話いただきました。医療者のみならず社会がCOVIDからの学びを生かす大切さを強調されました。

アトピー性皮膚炎をテーマとしたシンポジウムは佐伯秀久理事長(日本医科大学)に、脱毛症は高山学教授(杏林大学)、角化症は秋山真志教授(名古屋大学)に企画いただきました。また教育講演とし



図3 開宴準備中の懇親会場

て血管腫・血管奇形、色素異常症、川崎病、小児医薬品開発の話題、膠原病・リウマチ疾患、ランゲルハンス細胞組織球症、小児アレルギー疾患と神経発達症、爪疾患の8セッションを用意いたしました。一般演題は完全現地開催にもかかわらず、全国から56演題と多数の発表がありました。この場をお借りして御礼申し上げます。

会員懇親会は昨年に引き続き、立食形式で行いました(図3)。私が選んだワイン5種類を並べてお楽しみいただきました。

おわりに

参加者総数は招待者含め約500名でした。会場は2フロアにわたりましたが、中央のエスカレーターで移動できるため、コンパクトにパッケージされた形で行うことができました。盛会裡に終えることができたのも会員各位、あるいは非会員の先生方のご支援、ご協力があったことであり、心より感謝申し上げます。